様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１５２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０７７４

研究課題名（和文）地域における歴史意識としての古代史像の形成と展開の研究

研究課題名（英文）Study on the Formation and Development of the ancient history image as a historical consciousness in the region

研究代表者
大日方　克己（Obinata, Katsumi）

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：８０２２１８６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：『出雲風土記抄』諸本を収集、調査、分析し、風土記受容のあり方を明らかにした。松江藩によって出版された雲州本延喜式の考訂の経過と影響を分析し、その中心人物である藍川慎の学問的背景を、藍川慎の著作をほぼすべて収集して分析した。その結果にもとづいて、風土記や神話、神社と結びつけられた出雲地域の歴史意識、古代出雲像の形成について考察した。

研究成果の概要（英文）：I investigate the various book "Izumo Fudoki shou", it was studied. I investigate the “Engisshiki” that has been published by the Matsue clan and its academic background, were studied. To investigate the writings of Aikawa Shin of its central figure, it revealed the academic background. Based on the above, we discussed the historical consciousness that dates back to ancient times in the society of the Izumo region.

研究分野：日本史

キーワード：出雲国風土記　出雲風土記抄　延喜式　藍川慎　古代出雲

１．研究開始当初の背景

近年の歴史学の研究動向の一つとして、社会のアイデンティティとしての歴史の共有、歴史意識の形成が問題にされている。日本の地域社会においても、その歴史的由来の意識が重要な要素になることが、とくに近世・近代史の研究の中で指摘されてきている。

出雲地域においては、日本と地域の始源として「出雲神話」に関心がもたれ、神話と密接な関係をもつ杵築大社（出雲大社）の存在とあいまって、神話から古代、そして現代へとつながる歴史意識が強調され共有されてきている。とくに出雲地域では、『出雲国風土記』の存在も大きく、近世村レベル地域社会が具体的に古代に結びつけられ、多くの風土記由来地や神話由来地が具体的に特定されてきたという特徴をもっている。

これまで研究代表者（大日方）は、近世における『出雲国風土記』の解釈とその受容のなかで、それぞれの地域社会が具体的に古代から神話へとさかのぼるという意識が形成され、定着してきたことを明らかにしようとしてきた。「岸崎佐久次と『出雲風土記抄』」（『社会文化論集』、2010）では、出雲地域（松江藩）において『出雲国風土記』（以下、風土記）が流布しはじめるのは 17 世紀以降であり、とくに松江藩郡奉行の岸崎佐久次が 17 世紀末に著した研究書『出雲風土記抄』（以下、風土記抄）の影響が大きかったことを指摘した。風土記抄は風土記所載の地名や神社を近世の村や神社と結びつけることを中心に構成されている。それは地方役人として松江藩における近世郷村と年貢徴収、百姓支配のシステムを構築した一人でもある岸崎佐久次にとって、自分らが作りあげつつあった地域の歴史的由来を風土記にまでさかのぼって説明するという、現実的な意味と役割をもつものでもあったことを明らかにした。同時に、彼自身が仕える松江藩松平氏の出雲統治を、オオナムチ神（大国主命）以来の出雲国主の歴史のなかに位置づけ、その正当性のよりどころとするという意識も風土記抄の歴史意識の特徴として指摘した。

その後風土記抄は写本として流布していくことになるが、現在伝わっている風土記抄諸写本は異同が甚だしく多様であるにもかかわらずそれらの分析はほとんど進められていない。しかしこの多様な写本が伝来している状況は風土記抄受容のあり方を示しており、諸写本の分析は地域社会における風土記解釈と受容の特質を明らかにすることにつながるとみられる。

一方、近世後期において松江藩が延喜式の校訂と出版（『雲州本延喜式』）を行ったことも注目される。その背景については、本課題研究開始直前に発表した拙稿「「雲州本延喜式」と塙保己一・屋代弘賢・藍川慎」（『日本歴史』762、2011）において、塙保己一周辺で進められていた延喜式校訂作業や幕府右筆の屋代弘賢らとの松江藩医師藍川慎らの学者のネットワークを前提に進められたことなどを明らかにした。そして神名式と典薬式に校訂の力点が置かれていること、その事業を契機に松江藩がバックアップした神社調査が行われ、延喜式と風土記所載の神社のほとんどが見在する神社に比定されて、渡部彝『出雲神社巡拝記』などに結実したこと、『出雲神社巡拝記』に従って神社を巡拝することはまさに「古代出雲への旅」にほかならなくなること（関和彦『古代出雲への旅』、中公新書、2005）に注意をはらうべきこと、なども指摘することができる。

以上のなかで明らかになってきたことは、古代出雲の歴史意識を考察すべき基礎的な史料の収集、分析がまだまだ不十分であること、たとえば風土記抄一つとっても、その多様な写本と流布の状況が明らかになっているとは言い難い点である。そうした基礎的な調査を行い、如上の問題を発展させていくことが必要であると考えた。

２．研究の目的

1)風土記抄の諸写本の調査・分析を進め、『出雲国風土記』の受容のあり方、それが地域社会の古代像、歴史意識の形成にどのようにつながったか、2)『雲州本延喜式』の校訂、出版事業がどのように進められたか、およびその背景、それが神社調査と具体的にどのように関係していったかを明らかにし、それら二点を結びつけて全体として出雲の地域社会における古代像の形成と展開、その特徴を明らかにすることで、より大きな地域社会と歴史意識の問題、および現代の古代史像の原点を明らかにし、古代史研究そのものの再検討への問題を提起することを目的とした。

３．研究の方法

風土記抄と雲州本延喜式・藍川慎に重点を絞って、以下のように研究を進めた。

1)風土記抄の基本的なテキストを翻刻するとともに、多様な諸諸写本を調査、収集し、諸本間の異同と特色、系統を分析した。
2)風土記抄諸本調査の結果、明らかになった受容をめぐる人的ネットワークを分析する。
3)『出雲風土記解』など諸書との関係を分析した。
4)『雲州本延喜式』の校訂、出版事業の経過、背景とその特徴を、『雲州本延喜式』附録の考異、藍川慎の著作をほぼすすべて調査、収集し、分析することによって明らかにした。
5)以上を通じて、地域の歴史意識とその形成、展開過程を考察した。

４．研究成果

(1)風土記抄諸本について

① 桑原本の翻刻
　出雲風土記抄の基本テキストとして島根大学附属図書館所蔵桑原羊次郎旧蔵本（桑原本）の翻刻を行い、冊子として刊行した（島根大学法文学部山陰研究センター紀要『山陰研究』7 号別冊、2015）。
　この翻刻により、風土記抄諸本研究のためのテキストの定点が提示できたと考える。

②諸本の研究
　現在、風土記抄の写本は少なくとも 20 点以上が知られている。本研究ではそのうち、以下の諸本に注目し、比較、分析した。
　a 島根大学附属図書館所蔵桑原羊次郎旧蔵本（桑原本）
　b 古代出雲歴史博物館所蔵本（出雲歴博本）
　c 島根大学附属図書館所蔵望月重熙書写本（望月本）
　d 国立国会図書館所蔵藤浪剛一旧蔵本（藤浪本）
　e『出雲鍬』所引本（売布神社所蔵本を底本とした『松江市史』所収本）
　f 島根大学附属図書館所蔵神田厚敬書写本（神田本、俗解抄）
　これらはA-ab、B-c～d、C-f の 3 グループに分けることができ、いずれも異なったテキストになっている。

A 桑原本と出雲歴博本
　a 出雲歴博本はb桑原本の祖本としてよく、したがって岸崎佐久次の原本に最も近いものとしてよい。

B 望月本・藤浪本・出雲鍬所引本
　c 望月本、d 藤浪本、e『出雲鍬』所引本は同系統本である。Aの諸本と比較すると、省略、要約したり、記述順を変えたりしている部分が多い。しかし、地名比定、風土記郷の近世村への対応は変えていない。地名の比定を本質部分として捉え、文章表現はある程度自由に変更しているという特徴がみられる。

C 神田本-「俗解抄」
　風土記抄には「俗解抄曰」で抄文を記述する一群の諸本がある（以下、俗解抄）。その一つ神田本は、寛政 12 年（1800）4 月に神門郡古志郷の神田厚敬が書写したものであり、夥しい書入を持っていることも特徴である。
　神田厚敬は通称彦左衛門、隠居して常有、無味菴と称し、詩歌を好み国中の旧事に委しいとされている(『雲陽人物志』)。また『出雲国孝養伝』の編著者でもある。
　神田本の特徴は、Aの諸本の文をさらに解釈して、より具体的に分かり易く表現を変えたり、独自の情報を補ったりしている点が神田本の特徴である。。
　書入の分析から文化 3 年（1806）に出版された千家俊信校訂の『訂正出雲風土記』を意識していること、神門郡古志村比布智神社の神官春日信風との学問的交流がわかる。

③『訂補標註出雲国風土記大成』
　神田本と密接にかかわるものに、名古屋大学附属図書館所蔵（神宮皇学館文庫）の『訂補標注出雲国風土記大成』（以下、風土記大成）がある。風土記大成は富永芳久の所蔵となり 1907 年以降に流出した。
　富永芳久は杵築大社北島国造方の祢宜で、千家俊信に国学を学び、本居内遠の門下にもなった。芳久は風土記研究を進め、出雲国風土記を書き下したほか、『出雲国名所歌集』などの歌集を編集して「出雲歌壇」をリードした。
　風土記大成は『訂正出雲風土記』とは異なった風土記校訂をしている部分もある。『訂正出雲風土記』の校訂には、『出雲風土記解』の影響が大きい。『出雲風土記解』の本文のなかには、風土記の本居宣長本、谷川士清本の影響をうけたと思われる部分もある。
　『訂正出雲風土記』など定着したテキストがどのように確定されてきたか、とくに諸写本を訂正していった根拠を検証し直す必要と、字句の校訂も解釈に基づく部分があり、その背後にみえる校訂者たちの思想、出雲国や地域の姿の現在と古代に対する認識を読み解く素材になりうるのではないかという見通しを得た。
　以上の詳細は、大日方克己「出雲風土記抄の諸本-桑原本・望月本・神田本を中心に」（『淞雲』10、2016）として発表した。

(2)雲州本『延喜式』

①雲州本『延喜式』
　雲州本『延喜式』（以下、雲州本と略記）とは、松江藩によって文政 11 年（1828）に開板された延喜式の版本である。幕府右筆屋代弘賢筆による藩主松平斉貴の序文が附され、校訂者を先代藩主松平斉恒として出版された。実際の校訂は藩士藍川慎（玄慎）を中心に進められた。

②雲州本『延喜式』の種類
　雲州本の所蔵調査を行い、①松江藩（松平家）版、②岡田屋嘉七版、③吉川半七版の 3 種類あることを見出した。

③ 雲州本の構成と特徴
　本文 50 巻 50 冊、考異 7 巻 8 冊、考異附録上・中・下 3 冊が付け加えられて、合計 61 冊。考異は校訂の根拠を各巻ごとにまとめて示したものだが、巻 9（神名式上）、巻 10（神名式下）、巻 37（典薬式）がそれぞれ 1 冊で、神名式と典薬式に校訂の比重がかけられている。これらの特徴は、校訂の中心人物、藍川慎の学問と密接に関係すると考えられる。

④考異にみえる諸書
A延喜式諸本

とくに貞享本、京本が注目される。貞享本は宮内庁書陵部所蔵の貞享5年（1688）坊城俊方書写本にあたり、塙保己一・和学講談所旧蔵本だった。この貞享本には京本、中本によって校訂している部分が多い。

京本は京極宮家本、国立国会図書館所蔵の『榊原芳埜家蔵目録』の「延喜式　京本五十」に相当するとみられるが、現在存否不明となっている。

中本も現在存否不明の林読耕斎旧蔵中神守節本で、雲州本にみえる林本はこの中本の同本異称ではないかとされるが（虎尾俊哉『訳注日本史料　延喜式』「解説」、集英社、2000）、貞享本で京本、林本が使われているのは巻 22 までであるが、雲州本では、林本は巻 30 まで、京本は全巻にわたって使われている。また貞享本とは違う箇所で用いている場合もあるので、雲州本は独自に両本を参照していたとみられる。

雲州本は貞享本に大きく影響されており、貞享本の伝来を考えると、塙保己一から受け継いだものとみられる。

Ｂ史書・延喜諸式

Ｃ辞書・本草書

『新撰字鏡』『和名抄』『金光明経音義』『本草和名』が中心。「楊氏漢語抄」、「漢語抄」、「弁色立成」もみえるが、『和名抄』などからの引用、『一切経音義』『玉篇』『切韻』なども『新撰字鏡』からの引用だとみられる。

Ｄ風土記

出雲国風土記については、藍川慎自身、『出雲風土記抄』を所持していた。(1)②で指摘したように望月本は藍川慎所持本を書写したものだった。

Ｅ漢籍

唐律疏議・唐六典・唐開元礼など唐律令礼関係書、『漢書』『宋書』『周書』『唐書』などの正史類、『周礼』『礼記』『古文尚書』『孝経』などの経書類のほかに、『広雅』『爾雅』『龍龕手鑑』などの辞書、『一切経音義』などの音義、『切韻』『広韻』『集韻』など韻書を多用している点が特徴的である。

⑤校訂と出版の経過

文政4年に校訂事業が始まった。塙保己一は、文政4年9月に死去、松平斉恒も文政5年3月に死去した。以後、松江藩医師藍川慎が校訂の中心になった。

雲州本の校訂に貞享本の影響が大きかったことは、塙保己一の作業を継承したことを示している。塙保己一、屋代弘賢周辺では天明末年から延喜式校合の会が開かれていたことが確認できる。それらを前提としたものと考えられる。

⑥藍川慎の経歴

藍川慎の経歴は松江藩『列士録』（島根県立図書館）と、多数残されている著述の識語などからある程度知ることができる。

玄慎ともいい、実名は新吾。松江藩医師初代藍川通青の子として江戸に生まれ、文化元年（1804）7月から同2年2月まで長崎に留学し、唐医王亀新について医学を学んだ。江戸にもどった直後の文化2年4月に医師として十人扶持で新知された。江戸定府である。松江には藩主斉恒に従って3回、3年間ほど下向している。天保13年（1842）7月21日に江戸で死去した。

⑥藍川慎の学問

文政元年の『摶桑果図考』を著したのを皮切りに、藍川慎、藍川玄慎、原脊、原藍泉、源管占、茅山などの名で、多数の学問的成果を著述した。

注目すべき著作は、以下の通り。

Ａ古代氏族と式内社、歴史の考証

『姓氏一覧』『雲州式社集説』がある。

『雲州式社集説』は出雲国式内社の比定を試みたものである。延喜式神名式の校訂とも密接にかかわるはずだが、雲州本、風土記抄とも異なった部分がある。千家俊信の『出雲国式社考』の存在を知ったこともあって、考証は不十分なままで終わったようである。

これらは国学的研究であるが、同様に奈良・平安時代の出雲国司、出雲国造、中世出雲国の人物、出雲国の名所を詠んだ和歌を古典籍から収集して記載した資料収集ノートといってよい『茅山雑筆』もある。

また『査苞本朝医伝』も注目される。、大穴貴命・少彦名命からはじまって奈良・平安時代の史料から医に優れた人々の記事を収集している。

Ｂ本草書と辞書の考証

『摶桑果図考』『査苞和名考』『康頼本草』『聊鑒録』『和名抄考文』『茅山査苞』がある。いずれも延喜式校訂と深くかかわった著作である。

Ｃ医学・鍼灸

医師・考証医学者としての藍川慎の本業といえる著述群であり、和方の『大同類聚方』、漢方の『外台秘要方』『黄帝内経』『鍼灸甲乙経』『肘後備急方』などを扱っている。

Ｄ『大同類聚方』の考証

『大同類聚方』は大同3年（808）に編纂された和方薬集成書で、国造・県主・稲置・別首など諸氏族や諸国の神社に伝来する薬方を収集し類別したものであるとされる。しかし近世の伝本を、偽書あるいは後世の仮託本とみることが定説化している（『国史大辞典』）。藍川慎も疑義を抱き、諸本間での異同を記した『大同類聚方攷異』、記載事項を考証した『大同類聚方窃疑』を著述している。

『大同類聚方窃疑』は文政 11 年（1828）成立。神社人名、薬物などを、延喜式や国史記事などと対応させ考証している。

Ｅ考証医学の著述

唐の王燾が著した医書『外台秘要方』を考証した藍川慎の著作 2 点、『黄帝内経』についての『太素経攷異』『読骨度編』、『鍼灸甲乙経』についての『読甲乙経丙巻要略』『鍼灸甲乙経経穴主治』、『参攷挨穴編』、『穴名捜捷』、『夷水筆記』、『肘後方』の語句を解説した『読肘後方』などを、目黒道琢、堀川舟庵、森立之、山田業広、井上頼圀といった江戸後期から幕末維新期の考証医学の流れの中に位置づけた。

これまで藍川慎については考証医学者としての側面と、雲州本延喜式の校訂者としての側面が、別々に知られ、その両面を統一的にとらえ分析されることがなかった。延喜式の校訂には国学と考証医学の接点としての性格がみてとれる。

以上の詳細は、大日方克己「雲州本『延喜式』の校訂と藍川慎」（『社会文化論集』11 号、2015）として発表した。

(3)古代出雲の歴史意識の形成について

最後にまとめの考察と課題を提示する。

風土記抄の諸写本の調査・分析により、『出雲国風土記』の受容のあり方、それが地域社会における古代出雲の歴史意識の形成にどのようにつながったかについては、以下のような成果と見通しを得た。

風土記抄の写本の多様性の一端といくつかの系統についての見通しは(1)で述べた。多様性にもかかわらず、地名の現地比定についてはほとんど変更されていない。このことは、地名比定が風土記抄の本質部分だと受けとめられていたことを示している。

風土記抄の流布の状況については、まず『出雲鍬』などの地誌類への採用がみられる。

出雲国風土記そのものが地誌に引用された最初は、松江藩儒・黒沢石斎の『懐橘談』だった。風土記を引用した『懐橘談』が、岸崎佐久次の風土記調査と風土記抄執筆に影響したと考えられることは旧稿で論じた（大日方克己「岸崎佐久次と『出雲風土記抄』」（『社会文化論集』、2010）。『懐橘談』は石斎が承応 2 年(1653)に藩主に従って松江に下向したときに著したものである。石斎所持の風土記がどこに由来するかは今後の課題であるが、寛永 11 年(1634)に名古屋藩主徳川義直が日御埼神社に寄進して以降、出雲国内でも風土記が知られるようになっていた。岸崎佐久次所持本も日御埼神社本に近いとされているように、日御埼神社本が風土記の流布に大きく影響していた。

『出雲鍬』は、風土記抄文を松江藩の郡郷村を基準に抜粋して配列し直したものである。岸崎佐久次は、風土記の郡郷にもとづいて近世郷村を対応させ、それぞれの近世に至るまでの地誌や由来を付加していったものだったが、それを近世郷村を基準に再構成したものといえる。ここに至って、近世の郷村を起点に風土記を由来とする歴史意識が明確に構成されたといってよい。

『出雲鍬』に引用する風土記抄と同系統本が望月本であることから、江戸で望月重熙が藍川慎所持本から書写したものであり、江戸でも風土記抄が流布していたことがわかる。

18 世紀以降、国学者による風土記研究がさかんになっていくが、風土記抄はそれらに継承されていく。

内山真龍の『出雲風土記解』では、地名比定を中心に風土記抄を引用している。内山真龍は出雲国には一度しか来ていない。独自の地名考証や調査はできなかったため、風土記抄の説を引用するにとどめていた。

内山真龍は、杵築大社千家国造家の千家俊信と交流し、『出雲風土記解』を杵築大社に奉納している。千家俊信は、内山真龍のすすめで本居宣長の門人になっている。千家俊信は出雲国風土記の校訂本として『訂正出雲風土記』を文化 3 年(1806)に出版しているが、その校訂が『出雲風土記解』の影響を受けていることは(1)で述べた。

『出雲風土記解』と『訂正出雲風土記』に共通する大きな特徴の一つに、細川家本、日御埼神社本など出雲国風土記古写本で脱落している島根郡神社名を補訂している点がある。今のところ、最も古い補訂本は風土記抄である。岸崎佐久次が補訂した根拠は不明であるが、脱落したままだと、島根郡の神社の由来を他郡のように風土記にまでさかのぼらせることができなくなってしまうために、補訂したものと推測される。

近世の風土記の諸写本は、日御埼神社本などと同様に、島根郡神社を脱落させたものが多い。風土記抄で補訂された島根郡神社は『訂正出雲風土記』の出版を経て、広く一般化していったことになる。以後、『訂正出雲風土記』にもよりながら、近世の諸社が風土記社に対応させられていく。

千家俊信の門下でもあった杵築大社北島家方の神官富永芳久も風土記研究を継承し『出雲風土記仮字書』を出版した。それとともに「出雲歌壇」を支えていったことである。『出雲国名所歌集』などの歌集が編纂されたが、風土記地名を中心にした歌枕を詠み込んでいったもので、風土記地名の定着に大きな役割を果たした。

読み込まれた地名と作歌者の分析は今後の課題となるが、在村百姓レベルの一部にも和歌を通じても、風土記地名が浸透していったわけである。

式内社、風土記社の見在社への比定は、各神社にとってその由緒として決定的な意味をもつ。比定をめぐって、明治期にかけて論社が頻発したことはよく知られているが、千

家俊信の風土記や式内社研究はそれともかかわり、杵築大社と出雲国内諸社との微妙な関係にもつながっていた。『訂正出雲風土記』に疑問を呈して『出雲風土記密勘』を記した春日信風が神門郡古志村比布智神社の神官だったように、諸社もそれぞれの立場で風土記や延喜式との関係を自らの由緒として考えはじめていた。風土記や風土記抄の流布、伝来状況から見ても神社が風土記研究の核ともなっていったことは確かである。

雲州本延喜式の校訂・出版をうけて、松江藩が援助して、岡部春平や渡部彝らによる神社調査がすすめられていったことも、各神社が風土記や延喜式を意識し、そこに由緒を求める動きを強めることにもなっていった。

それは神話由来地の形成とも相まって、神社から民衆一般へと拡大していったであろう。そのなかで風土記や風土記抄が体裁を変化させつつ、さらに広がっていったことをうかがせる一例として、島根大学附属図書館所蔵の『出雲国風土記』の一本を見出した。表紙見返の書入と印記から能義郡の鉄山師家島家関係の旧蔵本とみられる。その体裁は各丁を二段に分割し、下段に風土記本文、上段に風土記抄文を記している。本文は、補訂された島根郡神社名を記すなど、風土記抄本文とほぼ同一である。「出雲国風土記」の表題をもち、体裁は異なってはいるが、風土記抄そのものであるといってよい。

現存する他の風土記抄諸写本の中にも、「出雲風土記」の表題をもつものが少なくなく、風土記抄が出雲国風土記テキストとしても流布していたことが知られる。

風土記抄を所持していた藍川慎の神社研究は十分なまま終わっていたが、もう一つ藍川慎の研究で重要な点としては、典薬式の校訂とそれにかかわる諸書、医に優れた人物の歴史研究がある。そのもつ意義はいくつかあるが、ここではまず『大同類聚方』の研究に着目しておきたい。延喜式には出雲からの薬草の規定が少なくないこと、『大同類聚方』には出雲国造関係の薬草の記述がみえること、から医薬と古代出雲の関係を考えようとしてことがうかがえる。また『査包本朝医伝』が大己貴命から始めていることも注目される。「因幡の素兎」の神話などとかかわって、大国主神を医薬の神ともみなしていく認識は、近世以降に形成されていったものと考えられるが、藍川慎もそれを明確に意識していた。延喜式に出雲関係の薬草の規定が多いこと、『大同類聚方』の記事、風土記の植物記載を薬草と結びつけて理解することとあわせて、もう一つの古代出雲像を形成していく。藍川慎の研究はそのこととかかわって注目されるべき問題である。

以上のように風土記、風土記抄を中心とした本研究の史料の収集、分析の成果をふまえて、地域社会と歴史意識の問題への見通しを示してみた。

日本書紀、古事記の神話と神話由来地の形成、杵築大社の思想、とくに近世杵築大社の思想形成と神話など古代出雲意識形成の関係、杵築大社以外の各社との関係、千家俊信・富永芳久らの動向など、まだまだ史料の収集と分析されなければならない多くの課題がある。本研究ではそれらの課題をさらに展開させていくための基礎的成果と見通しを提起できたのではないかと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①大日方克己「出雲風土記抄の諸本－島根大学附属図書館所蔵の桑原本・望月本・神田本を中心に－」『淞雲』18 号、島根大学附属図書館、p1-p23、2016
http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/metadata/34841
②大日方克己「翻刻・桑原家本出雲風土記抄」、『山陰研究』７号別冊、p1-58、島根大学法文学部山陰研究センター、2015
http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/metadata/34912
③大日方克己「雲州本『延喜式』の校訂と藍川慎」、『社会文化論集』11 号、島根大学法文学部社会文化学科、p23-p41、2015
http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/metadata/31543

〔図書〕（計 4 件）

①大日方克己ほか『古代豪族』、祥伝社、2015、（「出雲国造家の成立過程」を執筆）
②大日方克己ほか『松江市史通史編』、松江市、2015、（第 9 章、第 10 章を執筆）
③大日方克己ほか『フィールドで学ぶ斐伊川百科』、今井書店、2015、（「『出雲国風土記』と斐伊川をめぐる歴史」を執筆）
④大日方克己ほか『古代為出雲文化フォーラムⅠ　神話・青銅器・たたら』、今井書店、2013、（同書中の「古代出雲の世界」および「『出雲風土記抄』の歴史認識」を執筆）

６．研究組織

(1)研究代表者

大日方　克己(OBINATA KATSUMI)
島根大学・法文学部・教授
研究者番号：80221860

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし